

昭和五十一年十二月七日 ご講演

## 「人間たちの魅力」

作家 城山三郎先生

私は、原則として講演はしないことにしておりますが、新聞社とか、放送関係は、仕事上関係がありますから、これは止むを得ずします。しかし、今日お話をするのは、そういう場です。よそ行きの話とは違って、若い学生さん相手ですから、もう少し講演らしい講演ではなくて、私自身の学生時代を振り返りながら、もっと、私小説的なことをお話ししたいと思います。ざつぐばらんに、私という人間の形成されて行く過程で、学生時代からどういことが起こったかということを中心に、お話ししたいと思います。

さつき、紹介がありましたように、私は出身が現在の一橋大学ですから、作家になるということ、同級生は誰も予想しなかった。私自身も予想をしなかったのです。殆ど全部、今事業界に出て、大体、大会社の部長から課長クラスの間にいるわけです。そういう友達たちを見てどうなったかと、「学校を出てから十五年」という歌がありますね。私は学校を出たのが昭

和二十七年ですから、二十五年経っているわけです。二十五年経つと、一体何が起こるかということですね。そうしますと、ある男は、私の一年上で、寮で私の隣の部屋にいたので非常に親しかったのですが、丸紅のロッキード売り込みの先頭に立ってやった男で、週刊誌にも出ましたように怪死です。原因不明の死を遂げているわけです。それから私の同級生で、ある大手の商社に勤めていた男は、商社のマニラ支店長をやっている時に、三年前ですが機関銃で射られて殺されている。これは商売がたきに殺されたのですが、そういう事故が起きています。それからまた、私と同じクラスにいた人ですが、非常に気の優しい男で、ある意味の弱い男であって、人がよい男でしたが、ある銀行に入り、支店次長の時にお金を貸すわけですが、暴力団におどかさされて、支店長の権限を越え、お金を貸したわけです。そのために、金が返って来ないために免職になり、現在非常に苦しい生活をしています。最初の二つの例は、事故的なこと

がありますけれども、ずっと見て行くと、たとえば非常によく勉強した男がいる。これも大手の銀行に入りましたが、大変囁目されていたんです。ところが、その銀行の頭取の秘書にさせられた。頭取の秘書というと、勉強と関係ないですね。いろいろ細かいことに気をつけなければならぬ。人間関係に気を使わなければならぬ。ただ頭がいい、よく勉強しているというのでは勤まらない。いかに愛想よくお客様をもてなすか、いかに要領よく頭取のスケジュールを調整するか、車をいかにうまく手配するか、そういう、ある意味ではくだらない仕事をさせられるわけです。これはその男には合わない。とにかく、ものすごく勉強したい、勉強することによって働きたいというのですから、そういう気を使うような仕事は合わない。そのためにノイローゼになって、一年間休職した。ああいう男は駄目だということになり、秘書から次のポストに移ったわけです。銀行の教育関係の仕事に移って、また勉強をやり出した。この男は

大学を出てから、なお経済学の勉強を続けようというので、背広会というのを作り、その仲間と申し合わせ、月二回ずつ経済学の勉強会を持った。経済学者の都留重人という人を囲んで、勉強会をやった。これが今まで二十何年の間続いているのです。その間には、海外のものもほとんど読み、そして代表的な経済学の本を幾つか翻訳しているわけです。勉強会で翻訳し、都留さんの名前を監修にして出すわけです。ですから、その銀行へ入社試験を受けに行く人に対し、彼は選考委員もやるわけです。「あなたは、存学中という本を読みましたか」「何を専攻しましたか」というと、誰々と外国人の名前をあげますね。「どんな内容でしたか」、こういう内容でしたと、得意になって説明します。ところが、その本というのは、彼が訳した本なんです。全部知っているわけですから、だんだんと突っ込まれると、いい加減に読んでいる人は、すぐ分かってしまうわけです。そういうふうには大変勉強家です。一度はノイローゼになりましたが、また教育関係の仕事に戻り、更に調査関係の仕事に進み、更に勉強をしているというので、再び今度は秘書役となった。名前は秘書役ですが、重役待遇ですね。今度は頭取の代わりに考えるということですが、つまり、頭取の頭になり、この銀行はなにをすべきか、日本の金融はどうあるべきか、というようなことを全部彼

が考え、頭取にそういう報告を出す。頭取はそれを読んで、いろいろ意見を發表するというわけです。大きな部屋を貰って、車がついて、まだ若いのに自家用車で送り迎えます。そういう意味では、同期では一番出世しているわけです。一時は、そういうつまずきがあつたわけですが、しかし、非常に簡単なことですが、努力をしておれば、長い間には報われてくる。

今言つたようなことは、私の友達ばかりではなく、たとえば、三井不動産という会社がありますね。不動産会社で一番大きい会社の一つで、前の社長の江戸英雄という人がいますが、この人は東大の法学部を出て、三井合名に入った。当時の三井合名という会社は、三井財閥全部の最高司令部の会社なのですが、その関連会社の全部の株を持つて指揮するわけです。三井男爵三井一族がいて、三井財閥の全部を指揮するという会社です。そうしますと、そこに入ってくる社員は、全部東大の法学部なのです。しかも、華族の息子とか、そういう人ばかりなんです。江戸さんは、小さな地主の子供でして全然さえない。そういう日本の超一流の会社ですから、皆ダンディな恰好をしているわけです。彼は会社に行くと、靴が磨いていないとか、ズボンのラインが通ってないとか、さんさん馬鹿にされる。ですから、どんぐりの背くらべといつても、江戸さんなんか全株問題にならない。し

かも家柄も悪い。しかし、彼がどういうことをやつたかというところ、彼は法学部ですから、とにかく法律の勉強は続けようということです。そして毎月判例の研究会をやり、十三年経つたらある時、三井財閥で法律の問題で大事件が起つた。戦前の三井ですから、日本最高の弁護士を抱えているにもかかわらず、どうも争うと負けるということで、非常に三井の一族が心配したのです。その時に、この話を小耳にはさんだうだつのあがらない平社員の江戸さんが、どういふ事件だろうといつて調べますと、自分たちが十三年間勉強した中に、それとよく似た事件がある。判例によつて、いろいろ裁判の判決が出てきますから、判例に従うわけです。普通の判例の積み重ねから新しい判決が出てくるわけですから、それに非常によく当てはまる判例を思い出し、それを出して、弁護士に「実は何年前に、こういう事件がありました。この裁判には、こういう判決が出ています」と言った。そこで弁護士が調べてみると、確かに当てはまる、非常にいい判例だったので。これは有難いというので、早速その判例にのつとつて、裁判のやり方を変えたら勝つたんですね。そこで三井合名の社長である三井男爵に、彼は呼ばれるわけです。三井男爵は、彼の前で深々と頭を下げて、「本当に有難う。あなたのおかげで本当に助かった」といって、お金を三千円貰つて、

それから後、彼はほとんど拍子に出世して行くわけです。そしてそういう家柄のいい大変なエリートの中で、一番出おかれていた彼が、トップに社長になったわけです。これも彼の非常に地味な勉強の積み重ねから、そういうことが出来てくるのです。つまり、大事なことは、持続するということです。西洋の諺に、「持続とは、才能の別名だ」という諺があります。才能があるかないかというものは、人間にはわからないのです。ただそれが続いているかどうかということですね。続けられる人は、才能があるのです。あるいは、続けているうちに、才能が出てくるのです。続けることによって、人間の力がついてくるということなのです。

私の大学の仲間では作家になる人は非常に少なく、その中に、皆さんがご存知の石原慎太郎、そして先輩には、亡くなりましたが伊藤整という作家がいたのです。私が文壇にデヴェューして間もない頃、その伊藤さんが、私と石原慎太郎と三人で食事をした時に、こういうことを言ったのです。自分が長い間文壇生活をしていて、あなたたちに一つだけ忠告をしたい、助言したい。それはなにかというと、「これからさきの生活において、いつも自分を少々無理な状態の中に置くようにしなさい」と言ったんです。自然な状態にしておいては、人間というものは伸びない、変わらない、だめになってしまう。

しかしまた、無理な状態というのは、長続きしない。少々無理な状態ということなんです。これなら、続けることができるのです。これは私に取って非常にいい忠告だったのです。

そのことは、もう少し角度を変えますと、こういうことになるのです。皆さん方で小説の好きな方ならご存知でしょうが、田宮寅彦という作家がいます。この人は、私にこういうことを言ったのです。私も作家になりますと、いろいろつてを頼って、自分がとか、自分の息子が、あるいは自分の娘が作家になりたい。こういうものを書いているけれども、一本本当に才能があるでしょうかと、言ってくる人があるんですね。あるいは、自分がこういう作品を書いたけれど、読んで下さい、読んで批評して下さい。一体、自分は作家になる才能があるでしょうか、という人があります。私はそういうものは、全部見ないことにしております。けれども、そういう時に、そういうことを言われたら、つまりは作家になれるか、なれないか、そんなことはわからないのですが、たった一つだけ答える方法があると、田宮さんは言うのです。どういう答え方をするかというと、「あなたは、毎月五十枚ずつ、ずっと小説を書いていきますか」と、こういう質問をしなさい。そして、「ハイ」という返事したら、「ああ、あなたは作家になります」と。自分のところに、随分そういう人

が来たけれども、「ハイ」と返事をする人はいない。学生であれば、「夏休みに、自分は二百枚も書きました」「じゃ、九月はどうしましたか」「いや九月は、ちよつと書けませんでした」「じゃ、十月はどうしましたか」「十月は試験があつて、ちよつと」「十一月はどうですか」「やつと五枚書きました。今度冬休みにうんと書きます」。そういうムラのあることは、いくらでもあるのです。ある時は二百枚も書いた、ある時には百枚書いた、そういうことはあるのですが、毎月、コンスタントに五十枚ずつ書くということとは、そういう質問をすると、誰もいないということですね。つまり、ある月に二百枚書くということとは、無理なことなんです。しかし、毎月五十枚というのは、少々無理なことなんです。あなたたちがひと月五十枚の小説を書こうと思つたら、これは遊んでいては書けません、少し辛抱努力すれば書けますね。一日に一枚半ぐらい書けばいいんですからね。これはある意味では簡単です。努力する気持ちさえあれば、ひと月に五十枚を書くのは、決して難しいことではない。サラリーマンでもそうですね。休みがありますから、ひと月に五十枚書くのは、決して難しいことはないが、努力しなくては行けません。少々無理な状態なんです。それを何時もやってくるかどうか、今月五十枚書いた。次も書いた。それから飛んではだめなんです。毎

月ずっと続けるということ。あなたはいつも少々無理な状態の中に置くようにしなさいということ。それは作家志望であれば、「あなたは毎月ずうつと五十枚ずつ書いていますか」、そういう少々無理なことを、ずうつと続けていますかということ。それが続けられる人は、作家になれるんですね。これは、田宮さんが言いましたけれども、私もそう思います。もしあなたが、毎月五十枚ずつずっと続けて書かれたら、作家になります。これは、なかなか出来ないのです。ある月は書くけれども、なかなか書けないということなんです。しかし、決して難しいことではない。しかし、それを続けるということが難しいんです。続けなければ、力にならないということなんです。同時に、今まで申しあげてきたことから、もう一つ出て来る教訓があります。小林秀雄という、これも文学に詳しい方はご存知でしょうけれども、非常に高名な評論家がおられます。小林秀雄さんが、こういうことを言うんです。「人は、その性格に合った事件にしか出会わない」。つまり人生はいろんなふうに展開して行きますね。そうすると、自分が今こういうふうになったのは、あるいは目に遭ったから、こういう性格になってしまった。随分自分はいじめられて来たから、こういうひねくれた人間になってしまったというふうに、われわれは考えやすいんです。自

分は、周りのせい、いろいろ起こった出来事のせい、自分はこういう人間になってしまった。本当は、もっと明るい人間だったのだけれども、こういうふうになってしまったとかですね。しかし、そうじゃないんです。彼に言わせると、逆なんです。お前はそういう性格だから、そういう事件に出会ったんだぞ。これも人生の真実なんです。さつき私が言った例でもそうですね。ものすごい勉強をしていた。だから、そういう男は、その人に合った今の人生が、彼の前に展開しているんです。非常に気の弱い甘い男だった。そうすると、暴力団につけ込まれて、自分のポストを失ってしまうということ。やはり人はその性格に合った事件にしか出会わない。これは二十五年経って周りを見まわしてみると、実に正確に当たるんです。本当に努力していた人は、今非常にいい線を行っているのです。非常に気まぐれだった人は、やはり仕事は落ちつかないで、会社を変わったり、転々として行って、とうとう名前も現さない、姿も見せないというふうになって行ってしまふのです。そこにある意味で、人生の面白さというものがあるんですね。同じ事件に出会っても、決して同じ運命には陥らない。性格によって、全然受け取り方が違って来る。まあ、あなたたちは若いから、ご存知ないでしょうけれども、戦後間もない頃、皆社会が悪いという考え方をする

人がありました。「こんな女に誰がした」という歌がありましたね。映画にもなりました。つまり、こういう惨めな女に誰がした。周りが全部こういうふうにしたんだ。自分は悪くないんだということですね。こういう人間を作ったのは、周りなんだという考え方は、これは間違いないんです。お前はそういう女だから、そういう事件に出会ったんだということ。そういう性格だから、そういう事件に出会ったんだということが言えるのです。

そういう具体的な例は、いくらでもあるのです。私が小説で書いた例で一つあげますと、私は『雄気堂々』という小説を書いたのですが、この小説は、渋沢栄一という日本の最大の経済人で、幕末から明治・大正・昭和まで生きた人ですが、大変な日本最大の指導者になった人について書いておきます。今の大会社の殆どは、渋沢の息がかかって作られている。しかし、この人は生まれたのは、埼玉県山奥なんです。深谷という所がありますが、その奥なんです。深谷というのは、深谷葱の取れる所ですね。私取材に行きますと、降りる人が殆どいない小さな駅なんです。しかし急行列車が停まるんです。非常に不思議なんです。これは荒船さんが運輸大臣時代に、自分の選挙区で票を集めるために、無理やりに急行列車を停めることにしたという駅なんです。未だにお客さんが余りい

ないような駅なんです。そういう所から出て来ている。

明治の立身出世コースというのは、薩摩・長州・土佐・肥前の四藩の出身者です。官軍の中心になった薩摩と長州と土佐と肥前です。ここから明治の指導者というのは出てきていますね。しかも土族出身者が殆どです。ところが渋沢はそういう田舎の百姓上がりです。なぜ彼がこの大久保、伊藤などと肩を並べる日本最大の指導者になったか？ その秘密はどこにあるかということ、小説の形で探ろうとしました。その町へ行きますと、何もなし。彼の生まれたのは、血洗島村手墓という所なんです。川一つ向こうが上州ですから、しょっちゅう斬つたり斬られたりやつているわけです。その川で血を洗ったんでしょね。斬り合いをして手ばかり流れ着いたという、そういう何もなし殺伐とした所から出て来ているんです。上州の空つ風が吹きますから、非常に気性が荒い。ただいいのは、中仙道というのが、近くを通っているんです。そういう意味では、新しい情報が入って来るといことがあった。彼の例をなぜあげるかという、彼と彼のいとこの喜作という人がいる。この人が年代は殆ど同じで、家も近所です。考え方もよく似ているんです。この二人が、幕末の侍に腹を立てる。悪代官に腹を立てる。代官を支えているのは、幕府ですね。幕府はけ

しからん、幕府を倒そうということで、田舎で倒幕運動を起こそうとするんです。一種の全学連みたいなものです。武器を集めて、焼打ちをやるうということをする。これが見つかって、二人は命からがら逃げてくるんです。追いかけてくるわけです。捕まると、殺されるんです。逃げに逃げて、二人は京都まで逃げてくるんです。京都まで逃げて、なおまた追いかけてくるんです。たまたま一橋慶喜が京都守護総督という形で、京都に行っていたんです。一橋家の中の侍に知っている人がいたんですね。その人を頼って行って、「殺されるから助けて下さい。この邸にかくまって下さい」といって、一橋家の邸の中に転がり込むのです。一橋家というのは、幕府の親類です。ここまでは、町奉行は踏みこんでこれないわけです。それで彼らは命拾いをするんです。そこまでは、いとことは全く同じ人生を歩んで来ました。ところが、ここからさきの二人の人生は違ふんです。どう違ふかという、性格に合った事件にしか出会わないことです。渋沢のほうは、どういう性格だったかという、まずものすごく勉強するタイプだった。私は「吸収魔」という言葉を使ったのですが、とにかく物事を吸収して止まないんです。一橋家というのに入りますと、一体、一橋家とはなんだろうということ、一生懸命に調べます。なんで食っているんだろう、侍は何人

いるんだろう、武力はどうしてるんだろう。彼は一橋家に雇われたわけじゃない。逃げ込んだだけです。明日追われるかも知れない。だから調べてもなんにもならないと思うのが普通の人間ですが、彼は普通の人間ではない。吸収魔ですから、とにかく今自分がここにいるということ、すべてを勉強し尽くそうということ、一橋家のことを一生懸命調べる。調べると、当然これはおかしいということが出てきます。そうしたら、今度はそれを提案するんです。提案して止まない。昔の言葉で言うと、「建白」と言いますね。下の者が上の者に意見を出すことを、建白といいます。「建白魔」といっていいくらい、彼は建白して止まない。これも彼には、その資格はないんです。雇われたわけでもなんでもないのですから。しかし、そういうことを考えてやめてしまうのが、凡人なんです。彼は魔ですから、書いて出すんです。出したって、彼は資格がないんですから、すぐ破られてしまう。そうすると、また書くのです。出す、破られる、また出す。そうすると、あまり何回もくると、出されたほうも人間ですから、一体何を言っているんだろうと見ますね。そうすると、いいことを言っているわけです。たとえば、足軽頭が見てみたら、渋沢は非常にいいことを言っている。足軽頭は、これを破ってはかわいそうだ、また、これはお家のためになることだと

いうことで、おそろおそろもう一つ上の上役に持つて行きます。すると、上役は何も知らないから、また破つてしまいます。破られても破られても、彼は書くわけです。そうすると、また上の人が見ると、いいことを言ってますから、またもう一つ上に行き、そうして、最後にとうとう一橋慶喜の目に触れる。慶喜が見るわけです。非常にいいこと言っている。慶喜は名君ですから、この男は大変見所があるというんですね。どういう男だ。全然身分のないわけです。足軽以下ですから。しかし、いいことを言っているから、あの男に役目を与えてやらせるということです。そして、やらせるんです。彼の提案というのは、ものすごく勉強していますから、ただ思いつきを提案してるんじゃないんです。必ずそれを裏づける詳しいデータをつけている。だから必ずやれるわけです。そこで彼にやらせると、彼がそれを立派にやっつてのけるんです。そういうことから、彼は出世して行くわけです。つまり吸収魔であり、建白魔である。これは持続したわけです。いい加減な所で止めない。つまり人間的なレベルでやめない。魔になるくらい続ける。何分昔の身分社会ですから、足軽以下のもの書いたものが、とても殿様の眼には触れないんです。でも彼は魔ですから、ものすごく勉強して、悪魔のように勉強して、それを悪魔のように書き続けたわけですから、

とうとう慶喜の眼に触れて、慶喜に買われる。もう一つ彼の長所は、非常に辛抱強く、人の言うことを聞く人だったんです。彼は、晩年大変偉い人になった後も、いつも自分の眼の前にいる人に、心のすべてを傾けて応対するということを貫いたんです。いつも、どんな時でも、いま自分の眼の前にいる人に、心のすべてを傾けて応対するということは、なかなか出来ないことです。こいつはつまらない奴だから、早く帰ればよいとか、あとにもっと大事な用事があるとか、人間偉くなればなるほど、いろんなことを考えますね。しかし、そうではないんです。彼はどんなに偉くなった後も、いま自分の眼の前にいる人に、心のすべてを傾けて応対する。これは、やっぱり難しいことですが、大変大事なことです。そうしますと、相手の男はそういう応対の仕方に打たれますね。あの人は、心のすべてを傾けて応対してくれているんだ。じゃあ自分も心のすべてを開いて答えようということになります。つまり、お互いにお互いの持っている魅力、能力というものを、惜しみなく見せ合うことになるわけです。そしてしっかりと結ばれ合う。つまりいい加減の付き合いの中から出てこないものが、真剣な触れ合いによって出てくるわけです。そして相手も非常に渋沢にひかれるし、渋沢もまたその人間的価値を非常に高く買う。

この一つの例をあげますと、王子製紙という大会社があります。これも渋沢の作った何十、何百の会社の一つです。渋沢は王子製紙の社長も兼ねてやっていたわけですが、ある夏の暑い日に王子製紙に行きますと、石炭の夫が体じゅうに汗を流しながらモッコで石炭をかついであげている。王子の川を昔は石炭を運んできたわけです。製紙の燃料にするためです。その中に、そこへ石炭を納めている小さな石炭屋の若いおやじも、一緒になって石炭をかついで手伝っている。非常によく働く男なんです。そこで渋沢は、そういう人間にすぐ興味を持つんですね。「あの男は見所がある。ちよつと呼んできなさい。私はああいう男が好きだからちよつと話したい」という。社員が呼びに行きますと、その若い出入り商人が、「いや、私は今働いている真最中だ。ここの社長は今遊んでいるかもしれないが、自分は今一生懸命働いているから、今はだめだ」と言うのです。これは非常に生意気ない方ですね。普通だったら、そういうのは首になって、差し止めになります。そこは渋沢の偉いところです。「なるほど確かにあれは、今一生懸命働いているから、今呼ぶのは悪い。では、あの男はいつ暇になるか、暇になったら家に来るようにいいなさい」と言うのですね。それで聞きますと、「自分は夜分なら暇になる」。夜分とはまだ人間が活動している夜

の時間ですから、大体八時から九時までぐらいの時間ですね。「じゃ、夜分でいいから来なさい」というと、それから数日して、渋沢は真夜中にたたき起こされるのです。変な男が来て、「とにかく会うというから来たんだ。絶対に帰らない」といつて、玄関に頑張っているというわけです。そこで奥さんが、とうとう困り果てて、渋沢を起こすわけです。時計を見ると十二時です。十二時は夜分ではなく、真夜中です。しかし、そこが渋沢の偉いところです。起きて行くんです。そういうところが大事なんです。人間は簡単に腹を立てたりしてはいけません。起きて行って会うんです。「一体何だ、君は。夜分といったのに、今は夜中だ」と言うのと、その男が、「いや、私にとつては夜分です。まだ活動している真最中だ」というわけです。「では一体、君は何時に寝るんだ」と言ったら、二時に寝るといふわけです。では何時に起きるか聞くと、五時に起きるといふ。つまり三時間しか眠らないわけです。そこでいろいろ話をします。たとえば、「運」という問題について話をすると、運ということは、自分はどういうふうに思いますと、若い石炭屋が言うんです。「生意気なようだけれども、自分は運というのは、川を流れてくると考えている。だから、運をつかまえるためには、命がけでその川に飛び込まなければならぬ。そうして、運を拾い上げた

ら、この運は長い間冷たい水にもまれて流れてきたのだから、その後大事に育てなければならぬ。自分は運というものは、そのように考えているんだ」と話をするんです。つまり、そういう意味では、立派な考え方を持っている人です。渋沢は大変その男を買って、彼を一举に東京ガスの社長にするんです。今ほど大きくないんですが、当時は経営の苦しい時期もあつたわけですが、いずれにしろ、大会社の社長に抜擢するわけです。これは浅野総一郎といって、日本のやはり代表的な財閥を後に作ります。浅野財閥といつて、今やつぱり幾十の会社があります。が、つまり、こういう非常に辛抱強く人を結びつけるといふ能力があるんです。つまり、ある意味では簡単です。吸収してやまない、そして建白してやまない。そして人を結びつけてやまない、ということですが、彼がそれほどの大人物になつたのは、たつたこの三つのことです。この三つを、しかしいい加減ではなくて、魔という言葉をつけていいほど続けてやまなかつたわけです。これが彼の人生を開いて行くのです。たつた三つの心得です。つまり、どういふふうに彼の人生を開いて行くかといふと、幕末に彼がちょうど京都にいる時ですが、十四代將軍家茂が死にますね。そして自分たちが仕えていた一橋慶喜が將軍になります。これは困るんです。なぜ困るかといふと、さつき申

しましたように彼ら二人は、幕府が憎くてしょうがない。幕府を倒そうと思つてやったわけです。ところが、自分をかわいがつてくれた主人が幕府になつてしまつたわけです。命の恩人が倒さなくてはならない敵になつてしまつたわけですから、彼は精神的に、非常にスランプに陥るんです。その時に慶喜からパリに行けという命令が出るんです。これはまだ徳川時代ですよ。彼はパリがどこにあるか、全然知らないわけです。だが日本じゃないわけです。日本にいたら、頭を悩ましていくわけですから、とにかく外へ行けるということで、彼は喜んで出て行く。全く何も外国のことは知らない。外国ではズボンをはくんだという。そのズボンも何もないわけです。横浜に行つて、外人からズボンを買つてきたという上役がいるんです。その上役に碁の賭けの勝負をいどんで、まき上げて、そのズボンをはいて行くわけです。上は着物かなんか着て行くわけです。そういう状態で、彼はヨーロッパへ旅立つて行くわけです。昔の侍は、遠くに行く時、長い間留守をする時は、戦力が欠けて困らないように、自分の身代わりになる者を侍として殿に仕えさせておかなければいけません。渋沢は長期間パリに行きますから、この時に自分の身代わりとして、自分の奥さんの末弟である、まだ十八歳の平九郎という、これは非常に背の高い少年剣士を慶喜に仕え

さしておく。そして彼はパリに行きます。ところが、彼はパリに行きますと、さつきいったように、また何がなんだか知らなかったわけですから、パリに来るとまた同じことなんです。パリとはなんだ。パリのことを全部吸収しようということ。とにかく、パリという新しい西洋文明のすべてを知ろうとする。知ってまたどうしようということではない。そういうことは、考えないですね。今自分はパリにいる。ならば、そこで学べることはすべて学ぼうということ。今置かれた場について、学び得ることは、すべて学び尽くそうということ。町を歩いていると、下水が流れています。下水とは、川が流れていて、マンホールからパツと消えちゃうわけです。日本では、そういう川はないんです。川は必ず、ずっと流れて行きますからね。この川は、おかしいというわけです。どこへ行くのかと、この蓋をちよつとあけると、マンホールの蓋をあけさせる。すると、ザアと下に落ちて行くわけです。これまたこの滝は、どこへ行くかというので、マンホールの中に入って行くわけです。パリの下水道は、人間が歩けるぐらいに大きいわけですから、まったくさい下水を見て回るんです。パリ全市の下水道を、彼は見て回るんです。そして全部記録するわけです。歩けない所は、管理用の小舟がありますからそれに乗って、全部見て記録する

んです。これは彼が日本に帰って、下水道会社を設けようなどは全然考えていないわけです。つまり、下水というパリを支えているもの、文明を支えているもの、これは一体何かと、知りたい、吸収したい、ということだけなのです。あるいは、アパートを借りますね。賃貸借の契約書を交わします。日本ではそういうものは何もないわけですから、それも全部写して訳をつけるわけです。これも別に彼が帰って家主になるうなんていうことは関係ないんです。とにかく、勉強できるものは、全部勉強し尽くそうということ。こういうことを、彼はパリでやっているんです。なぜ彼がパリに行かされたか。パリに行く人はたくさんいたわけですが、彼が見込まれた点は、さつき言ったように、ものすごく勉強をするし、そのことを必ず提案するし、それからもう一つ、非常に辛抱強く人の言うことを聞くという点です。外国に使節を送る時には、そういう人がいるんです。侍ですから、非常に皆気の荒い連中です。しかもその使節は、攘夷派と開国派の両方の侍から作られていたグループなのです。だから当然けんかをする心配があるので、なんとかさういう対立する侍たちをけんかさせないようにして連れて行く奴はいないかということ、慶喜がいろいろ考えたのです。幕府にはもちろんたくさん侍がいます。随分たくさん人間の人間がいるんですけれど、

でも、そういう人間が思いつかない。水戸家にもない。そうすると、新規に召しかかえた百姓上がりの渋沢という男のことを思いつくわけです。あの男なら、実に辛抱強く人の言うことを聞く。あの男をつけてやれば、この使節団はけんかをしないで済むであろう。そこで、渋沢に行けというんです。だから渋沢がパリに行けたのは、大変に幸運だったんです。その幸運は、決して転がり込んできたわけではないんです。彼のそういう生き方、こういう彼の生活の積み重ねが、そういう人生を持ってきたわけです。そういう人間だから、そういう役目が与えられた。つまり、人は性格に合った事件にしか、出会わないということなのです。

一方、いとこの喜作のほうはどうかというと、ものすごく攻撃的性格なのです。気が荒いので、侍になりたくてしようがなかった。それがたまに侍の邸に転がり込んだので、これ幸いと、明けても暮れても剣術です。猛練習をやるわけです。そしてどんどん腕を上げて行くのです。渋沢がパリに行っている時に、戦争が起きました。鳥羽・伏見の戦いが起きましたね。そうすると彼らは親衛隊ですから、最前線で戦うわけです。喜作のほうは戦争したくてしようがなかったわけですから、待っていましたと最前線で戦う。そして鳥羽・伏見で敗れて、江戸へ行きます。そして江戸へ行くと、旗本八万騎な

んで、皆いばっていますけれども、しょんぼりして、何もしないわけです。そこで彼は腹を立てて、なぜ戦わないのだ、心ある者で戦うというので、彼が呼びかけて作ったのが、彰義隊なのです。そして彼は、初代頭取になるのです。旗本八万騎と言いながら、全然そういう人がいなかったわけです。そうして、百姓上りの男が隊長になったわけです。彰義隊がある程度動き出した後で、旗本たちがこりゃけしからん、あの頭取は百姓だということで、テロとクーデターで彼を追い落とすんです。そのために彼は追われて彰義隊から失脚するわけです。そして失脚して、郷里に近い飯能という山の中に立てこもるのですが、そこでもまた徹底抗戦です。そしてまた彼は農民を集めて、農民兵を組織して、何万という官軍を迎え撃って戦うんです。これは負けるに決まっている戦いですが、とにかく彼は攻撃一方で、「なにを」ということとしかない男ですから、本職の侍たちは皆手を上げて何もやらないのに、彼一人が山の中に立てこもって、義勇軍を作って戦っているわけです。そこで彼は瀕死の重傷を負い、そしてなお命からがら五稜郭へ行って、また戦うわけです。つまり、人はその性格に合った事件にしか、出会わないということです。洪沢と彼のいとこの二人が、これを全くはつきり見せているわけです。その飯能の戦いで、洪沢が自分の身代わり

として残して行った平九郎は、命を落とすのです。つまり、もし洪沢栄一が日本にいたら、飯能の山奥で、まだ二十代で命を落としていたということなんです。しかし、洪沢は幸運にもパリにいた。しかし「幸運にも」という言葉でいったら、おかしいのです。彼の努力によって、彼のそういう生き方の積み重ねによって、彼はその時パリにおれたのです。そしてパリで戦争のことも何も知らないで、ものすごい勉強をしていたわけです。そうして、彼が日本に帰って来ますと、幕府は倒れて、ないわけです。彼は失業者です。失業者であり、新政府にとっては敵です。ところが、その敵である新政府が、新しい政治をやって行く上について知識がない。だから、外国のことについて詳しい人材が欲しかったわけです。欲しくてたまらない。敵とかなんとかそういうことは、問わないわけです。その欲しい連中が帰って来た。その中で、ものすごく勉強した男が一人いる。洪沢という男は、ものすごく勉強しているというんです。そういうことが、新政府の指導者たちの耳に入るんです。そこで大隈重信が頼みに行くわけです。ぜひ新政府で働いてほしいということで、大蔵省の局長クラスに抜擢するわけです。つまり、すべて彼の努力が、そういう人生を開いていったわけです。喜作のほうは、さっき言ったように、これはこれまた立派な人です。その性格を貫い

て、純粋に生きてたわけです。しかし、全く同じ育ち方をし、同じ年齢をし、同じ所に生まれても、人生はそういうふうに変わってくる。これは全く性格に合った事件にしか出会わないということだと思ふのです。だから、人生というのは、面白いんですね。事件によって、みんな同じ人間ができて行くのなら、実につまらないわけです。同じ事件に出会いながらも、みんな乗り越え方が違うということです。そこに、人生を生きて行く上での魅力というものがあると思ふのです。今の話はかなり古い話ですが、今どう生きるかという問題でも、同じようなことです。勉強勉強といつて、教育ママみたいなことをいうな、ということになるかも知れませんが、しかし事実なんだからしょうがないんです。勉強しないのは、全部だめになつてくるんです。しかし、出世するために勉強しようと思つては、だめなんです。さっき言ったように、とにかく勉強したいから勉強するんだというんです。私も、ちようど皆さんの気分というのわかる気持ちでいるんですが、あまり勉強ということに関心がないんです。何のために勉強するかということが、はつきりしないんです。じゃ、私は何のために勉強したかということ、これはちよつと皆さん方と違ふんです。だから、お前は勉強するのが当たり前だといわれるかも知れませんが、私は十七歳の時に、海軍

に少年兵として志願したんです。「人のいやがる海軍に志願してくる馬鹿もある」という歌があります。私は志願して行ったんですが、あの時代はそうしなくてはだめだ、自分たちがお国のために命を投げ出して死ぬのが一番いい、という考え方だったので。それで私は行かなくともいい海軍に行つて、ひどい目に遭つて帰つてきたわけです。つまり、自分が期待していた海軍は、入つてみたらものすごいめっちゃくちゃな海軍なんです。とにかく、腐敗しきつているといますか、皆さん方は今衣食足りているから、そういう苦勞というのはよくわからないでしょうけれども、私たちは栄養失調といひますか、餓死寸前の食事ばかり食わされているのに、士官たちは毎日のように天ぷらだ、トンカツだ、というわけで、士官食堂の掃除に行きますと、真白な食パンが、かびて捨ててあるので。僕は、米の飯もろくに食えないんです。つまり、そういう海軍の姿を見て、非常に幻滅を感じたわけです。そうして終戦で帰つてくると、今度は僕らは国のためにと思つて行ったのに、国賊扱いです。予科練くずれ、特攻くずれということ、非常にひどい目に遭つたわけです。

帰つてきてから世の中を見ると、知りたいことが一ぱいあるわけです。あなた方からでも、考えればそういうことになると思うんですよ。

一体、自分は何のために生きているのか、というようなことから考えて行けば、いくらでも勉強することは出てくると思うんです。ですから、私が帰つて来て、十七、八歳の頃考えたことは、とにかく知りたいということ。人間とは何か、国家とは何か、ということ。だから、少しでも勉強のできる状況の所へ行きたいということですね。私は家が商家で、長男ですの跡を継がなければいけないと、商業学校に入れたわけ。商業学校は、いわゆる普通高校じゃないわけですね。そして帰つてきて、もっと勉強したい、もっと上級学校へ行きたいと言いますと、そういう所からいつて一番長く勉強できるのは、一橋なんです。予科三年、学部三年と、続けて六年間勉強できるわけ。他の学校に行くと、三年間で終わつてもう一回試験を受けなくてはいけないんです。私があつた学校へ行ったのは、六年間自由に勉強ができるということ、あの学校へ入つて、とにかく本が読みたいということ。当時は全然本がなかったんです。買えない。いい本を買うためには、その本が出版される前日に、一晩徹夜しなくてはならないんです。岩波書店の前あたりで一晩徹夜して、あくる日買わなくてはならないわけです。たとえば、『善の研究』という本がありますね。西田幾多郎の非常にいい本です。こういうものが売り出しになると、学生が前の

晩から行って、一晩行列して買うわけです。私是不精者ですから、行くのはきらいで、学校が国立になりましたから、国立から神保町まで出なくてはならない。ですから私はどうせそういうことで時間をつぶすのだったら、本を写そうと思つたのです。本を写せば同じことですからね。そこで全部その本を写したわけです。写すことによつて覚えますし、それほど知識に飢えていたといひますか、それほど本というものにこもっている価値というものに、ひかれていたわけです。あるいは、当時電力不足のため、計画停電といひて、地区を決めて、たとえば八時から九時までは文京区は全部停電、九時から十時までは中央区は全部停電、というように大体二時間ぐらい、一番電気を使う時間にやるんです。そうすることによつて、電力の不足をカバーしていったわけです。そうしますと、本を読んでいる時に停電になると、その時間が惜しくてしようがない。ですから、私は八時から計画停電ということになると、八時ちよつと前に寮を出て、国立から中央線に乗り、新宿から山の手線に乗り換えるわけです。そして山の手線を一周して、新宿に戻るわけです。そして新宿からもう一度国立に戻ると、大体この間二時間ぐらいですね。その間本を読むことができるわけです。そういうことを、しよつちゅうやつたんです。計画停電だからといひて、その間ポーツと

しているのが惜しいんです。それはごく当たり前のことだったんです。電気料もいらぬし、とにかく二時間は読めるというので、このようなことをずっと続けていたのです。じゃ、学校には一生懸命行ったかというと、あまり行かなかったのです。今は私も地方の国立大学の教師を十一年してましたからわかるのですが、単位を取るにも、出席を強くしなくてはいけないわけですね。あんなものは、しなくてもいいわけですから、とにかくすることにしていますから、しなくてはいけないので、そう休むことはできませんが、当時はそういうことがなかったんです。ですから、私は殆ど大学に行かなかったんです。行かないというのは、行くのが惜しかったんです。つまり、大学の講義は決まっています、スピードが本ほど早くない。本を読んだほうが早い。ですから、大学へ行くのが惜しくてしようがない。これは私だけではなくて、当時私のいた大学の寮は、殆ど大学へ行かなかったんです。皆朝から、国立の寒い所の、戦争中兵舎代わりに建てられた寮にこもるのです。この寮は空つ風が吹きすさぶし、寒くてしようがないから、寒い時には床板をはがして燃やしたりしますから、風通しは一層よくなる、到底普通では過ごせないのです、みんなそれぞれ押入れに入って、電気を引っ張って、そこで本を読んでもおろのです。ですから、昼夜の観念が

ないので。明けても暮れてもみんなごろごろごろ、いも虫みたいに本を読んでいるのです。決して遊んでいるわけではないのです。その頃は、食べ物全然ない時代です。また学校へ行くだけのカロリーがないのです。朝すいとんを飲んで、お昼用にといつて握り飯を一つくれるわけですが、ところが朝それだけでは足りないもので、食べてしまうので、そうすると昼のものが何もありません。だから、昼は寝てるよりしかたがないのです。動くとお腹がへりましますから。そういう状態で、しかし、みんな本が読みたいということ。ごろごろして押入れの中で本を読んでもおろすということです。ところが、そのうちお腹が減っていたということもあるんですが、面白半分もあつたんでしょう、あの部屋の奴が猫をつかまえて南京袋に入れて殺して、焼いて食べたんです。動物性蛋白が足らなかつたことは、確かにありました。ところがそのあたりか、その部屋から漏電して寮は全部燃えちゃつたんです。それは昼間でしたが、消防が来たんです。そこで学生ですから財産なんかないけれども、当時は布団というのが貴重品だったので、消防夫が一生懸命布団を出します。すると、寝ていますから中から人間が出てくるわけです。それでかなり命拾いをしてる者もいたわけで、そういう状況が、私たちが学生時代を経てきた時代ですから、そう

いう私たちからみると、一番惜しいのは時間なんです。ですから、私たちの仲間では、アルバイトをするということは、非常に軽蔑されたのです。苦しくてアルバイトをしても、決していることではないんです。アルバイトに行くには、皆小さくなつて行つたのです。つまり、一番大事なのは、時間を生かして勉強することですから、その出来ない人間というのは、だめな奴だということです。だから、皆生活が苦しくて、生活のレベルはうんと落としても、食うや食わずでも、とにかく、アルバイトはしないで勉強をしよう。まして遊ぶなんてことはしません。そういう時間を経過してきたわけです。そういう生活がいいとか悪いとかいうことではなくて、そういうことを考えれば、もう少し皆さんたちも、アルバイトということを考え直す必要がありますね。あるいは毎日の時間の使い方、あるいは学校における時間の使い方、そういうものも、もう少し考えられたらいいと思います。

私は大学を出てから、地方の国立大学に奉職しまして、その大学からまた派遣されて、一橋大学の経済研究所に一年間研究のためにきていたわけですが、その頃でもやはり殆ど同じ状況です。それは大学の教師ですから、学生寮には住めないから、三畳の部屋を借りてそこに住んで、その頃そういう研究所の若手たち、今皆

一橋の教授なんかになっていますが、そういう連中と散歩しながら話すことは、とにかく勉強したいけれども、生活の夢としては、一生の中にハムでビールが飲めるようなそういう生活ができるようになったらいいなあ、という話をしたのです。つまり、学者の生活というのは、もともと苦しいわけですが、本当にそれができなかったんです。ハムを買ってビールを飲むということは出来ないような状況ですね。ですから、そういう意味から見ると、この二十二年間、二十五年間の、日本の変わり方というものはものすごくいいです。私自身も、そういう意味では、思いがけないような生活です。こういうようになるとは、全然思わなかったわけです。私はここにくる前に、ちよつとある記者のインタヴューがあつて、あるホテルで会っていたわけですが、もうクリスマスツリーが飾つてあつて、きれいにしてあるんです。デコレーションが非常にきれいに飾つてある。ちよつと昨年は今頃は、私は対談のためにアメリカに行きまして、ニューヨークとか、ロスアンゼルスにいましたが、非常に大きなクリスマスツリーが飾つてあるわけです。夜なんか実にきれいです。大通り一ぱいに、ロスアンゼルスのハリウッドから、サンセットブルーバードという大通りまで、その真中にずつともみの木が、イルミネーションをつけて飾つてあるんです。実にきれいなんです。

そういう光景を見たり、ちよつとクリスマススイヴの夜は、クスコというアンデス山中の、インカの遺跡のある古都で、小さな教会に行つて、インディオたちといっしょに礼拝の中に加わつたりし、お正月はリオデジャネロで、晦日から元旦を迎えたわけです。リオデジャネロという所は、あの辺はブラジル日系人が非常に多いわけですから、一軒だけ日本料理屋がありまして、大晦日の夜に行つたんですが、全く日本ふうな座敷など造つてあつて、鏡餅も飾つてあるし、掛軸もかかっているし、日本料理がどんどん出てくる、日本酒が出てくる、おかみさんが出てきて、紅白歌合戦が始まりますけど、ご覧になりますかというんですね。僕は日本でも見たことがないのに、なぜブラジルにきてまでそういうものを見なくてはいけないかということですが、これはブラジルでは紅白歌合戦の放送は、二回目なんです。ブラジルは、日本とちよつと夜昼逆になりますから、日本の大晦日の夜というのは、ブラジルの朝の九時なんです。朝の九時から、ブラジルでは紅白歌合戦の放送をしてたんです。それを録画して、もう一回夜の九時からやります。日本でいえば次の日になるわけです。ですから、ブラジルの日系人は、二回紅白歌合戦が見れるんです。つまり、そういう生活を自分ができるということは、さつき言ったように、ただビールが飲みたい、ハムが

食べたいということだけを思つた身にとつては、実に不思議な気がするんです。不思議な気がしますけれども、家の息子たちが、親爺はいい生活をしているなど言う。昨年は三回、ブラジルやヨーロッパや、アメリカに行つたり、アメリカには二回行き、ヨーロッパと中南米に行き、更にアフリカに行きましたからね。とにかく、好きな所に行つて、好きな生活をして、実にいいなあと言うけれども、やっぱりお前と違うんだということですね。お前たちの頃は、俺はこういうことをしてたんだ。お前だって、こういう生活をしていけば、必ずそういうことができるぞということ。勉強の量、読書の量が随分違うんです。と同時に、やはり続けるということ、一筋に生きるということ、考えなくてはいいけません。

皆さん方お読みになつたと思いますが、リチャード・バックの『かもめのジョナサン』という本がありますね。ラスベガスで彼にも会いました。彼は自分の自家用機を操縦し、非常にきれいな女性を連れて、砂漠の中の宿に会いにきてくれたわけですが、彼はいろいろと面白いことを話してくれたのです。『かもめのジョナサン』という小説は読まれたと思いますが、かもめという非常に大きな翼を持った鳥が、しかし実際には非常に低いところしか飛んでいないんです。しかし、おかしいじゃないか、自分

にはこんな大きな翼があるから、うんと空高く飛べるはずだという自分の可能性に目覚めて、群れの中からジョナサンというかもめだけ一羽が、空高く舞い上がって行くこうとする話です。群れから離れて自分の一人だけの道を、自分の可能性に挑戦して、空高く舞い上がって行くこうという小説です。彼はいろんな話をして、いろいろ参考になることを言ってくれたわけですが、最後に一つだけいいますと、彼は職業を転々としているんです。ありとあらゆる職業を転々として、今も飛行機会社を経営したりしています。ただ一つ彼がずっと続けてやまなかつたのは、ハイスクール時代から続けてやまなかつたのは何かというと、原稿を書くことなんです。自分はどんな時でも、タイプライターを離したことはなかった。どんな苦しい時でも、どんなに貧乏した時でも、どこへ旅行した時でも、必ずタイプライターを持って歩いた。つまり、どんな時でも原稿を書き続けたということなんです。彼は、非常に気まぐれな、フラフラした好き勝手な生活をしているようにみえますけれども、原稿を書くということについては、いかなる時でも必ずタイプライターを身につけて離さなかったというんです。ただ一度だけ、ほうり投げたい時があった。それはどういう時かというと、『かもめのジョナサン』を書きあげた時です。これはあの本が世界的ベストセラ

ーになる前です。ただあの原稿を書きあげた時に、自分の一番書きたかったものを、自分の全力を尽くして書いたということなんです。だから、もうこのタイプライターを投げ捨てよう、その時だけ思ったということなんです。つまり、自分の全人生を投入した作品を書いた。その時だけ、タイプライターを投げ捨てようと思っただけでも、彼は生涯、実にいろんな目に会い、いろんな生活を転々としたけれども、タイプライターだけは、決して離さなかったというんです。つまり、そういう一筋に生き続けるといいますか、それが彼の大きな魅力になっているのです。人生は、そういういろんなことが出来るものではないのです。今の若い人は、いろんなことがやれるし、いろんなことに興味を持つし、いろんなことをしますが、やはり人間は平等に時間が限られているんですから、やはり何かを省くよりしようがない。何かを省きながら、しかもその中で、「これは」と決めた一筋の道を、非常に粘り強くやり続けるということですね。大変まとまりのつかない勝手な話をしましたが、これで終わります。(拍手)

(文責在記者)

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。